



学校だより

～ ひびきあう心 かがやく笑顔 ふれあいの丘 斎藤分 ～

令和4年 9月30日 10月号

横浜市立斎藤分小学校 校長 黒木 健

自分のトリセツ

校長 黒木 健

本校保護者の皆様、地域の皆様におかれましては、益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。さて今月の学校だよりは、「自分のトリセツ（取扱説明書）」と題してお届けしたいと思っております。学校とはどのように関わっていけばいいのか、またそれにはどのようなバリエーションがあるのかなど、子ども目線から俯瞰できればと考えての試みです。

6月号の学校だより「本と辞書と私」でも述べたところですが、私は中学2年から高校1年までのおよそ3年間、不登校に陥っていました。いじめ、受験勉強への不安、友達との人間関係など、その考え得る理由は様々ですが、今振り返ってみると当時の私は、そもそも「学校との関わり方」が十分に分かっていなかったのではないかと一つの仮説にぶち当たりました。例えば、担任に自分の訴えを聞いてもらっても、その時抱えていた不安などをただ漏らしていただけで、自分として具体的にどうしてもらいたいのか、或いは、どうすることで自分が今抱えている不安が少なからず解消されるのか、担任にそれを明確に伝えきれていなかったことも原因の一つなのではないかと振り返っています。その当時は生徒数が多かったこともあり、主訴をより明確にして伝えなければ、自分の思いや悩みも担任の意識には印象として強く残らなかったのかもしれない。

この私の経験から言えることは、もっと自分の言葉で自分の思いや考えを伝えればよかったという反省です。少々勇気のいることかもしれませんが、自分の思いや考えを自分の言葉に置き換えて表現することは、学校内に限らずこれから成長を遂げていく過程で必ずや求められる資質・能力にも繋がっていくはずだからです。また友達や先生にもっと自分を知ってもらい、理解してもらうために、自分の好きなことや今取り組んでいることなどについて、日頃そうした話を周囲に伝えておくことも、時にはプラスに作用することがあるかもしれません。「でも、そんなことを言ってもそれが上手くできないから悩んでいるのではないか。」という人には（私も中高生時代はそうでしたが）、実際に言葉には出せなくとも、先に述べた自分の好きなことや今取り組んでいることを粘り強く続けることで、それが徐々に周囲に伝播し、他者からの自分への理解へと繋がっていくということだってあるはずです。私は中高生時代、学校の内外を問わず友達との関わりを出来る限り避け、本を読んで一人で過ごすことが多く、また自分の意思を表明する場も少なかったものの、逆にそうしたことが私の一つの個性だとして周囲に認識されていた部分もあったと感じています。

私たち教員は、発信したくてもなかなかそれができない子どものSOSを拾い上げたい、またその思いや考えを受け止めたいと思って、日々子どもたちと向き合っていますが、一方でそれに気付けない場合があることも認めないわけにはいきません。そうしたことから、まずは「自分にできる、これなら自分でもやれそうだと思う発信方法」を探して、それを試してみたいです。上述した私の中高生時代の回想シーンにもあったように、声にすることができなくても、周囲の人に少なからず自分はどういう人なのかということを知ってもらえる方法がきっとあるはず。学校と子どもとの関わり方は決して一律である必要などなく、子どもの数だけ関わり方のパターンが存在すると、私はこれまで信じてきました。そう考えると、自分の立ち位置から学校との関わり方について考えることは、まさに「自分のトリセツ」を考える作業そのものと言えるのかもしれない。